

何故に上方で合巻が作製されなかったのか

服 部 仁

江戸時代、子供向きの絵本が、赤本、黒本、青本となり、安永四年（一七七五）刊、恋川春町画作『金々先生栄花夢』以降のものを黄表紙と呼ぶ。そして文化三年（一八〇六）頃以降、黄表紙が合巻に変化する。これが国文学史に載る草双紙の流れである。

ところでこれは江戸においての話である。上方においてはどうかであったのであろうか、ということについては、江戸の分も含めて、『近世子どもの絵本集 江戸篇』（鈴木重三氏・木村八重子氏編、一九八五）・『同 上方篇』（中野三敏氏・肥田晴三氏編、一九八五）に集大成されている。

ただし、これはどこまでも「子ども絵本」についての話であって、江戸では、『金々先生栄花夢』の出現によって、「子ども絵本」としての青本から大人の玩弄書としての黄表紙へと一大変貌を遂げる。その黄表紙の発展的後裔が、合巻なのである。ところが上方の子ども絵本においては、これに対応する変化が現れない。

上方において、江戸の青本から黄表紙へという羽化に対応する現象が、何故に起きなかったのかは、残念ながら不明である。

しかしたまたま、何故に上方において合巻作製がなされなかったという原因と思しき史料を目睹したので、それについて紹介し、若干の考察を加えてみる。

それは、仮に名づけて「書肆綿屋喜兵衛引札」（参照図）と言う。つまり、大坂心齋橋通り塩町角にあった書肆綿屋喜兵衛の堀江出店の店頭風景を、絵師長谷川貞信が描いた出店披露目の大判（本紙全体縦二四・六×横三七・一糎）の一枚刷りである。上部の額に記してある「家傳秘方 本屋むしおさへ」「竹本筑後大掾遺方 大聲圓」は、綿屋喜兵衛方で製剤販売した薬である。書肆が薬を扱うことは、江戸時代では珍しくない。例えば、後年のものではあるが『尾陽商工便覧』（明治二十一年刊）（昭和六十一年刊の複製本によった）を繙いて、『北斎漫画』等を出板した名古屋玉屋町三丁目の片野東四郎（東壁堂、永楽屋）の頁を見れば、店頭図の右に「萬邦書籍問屋 本店」「呉服太物類 北店」「賣藥請賣處 南店」と併記しており、店頭図に目を転じると一軒の店舗の真ん中が書店、右（北）が呉服屋、左（南）が薬品店である。他にも『尾陽商工便覧』には、津島橋詰町の書籍商山田甚助の頁に取り扱い品目として「内外書籍」「和漢筆墨」「諸府縣賣藥」を挙げている。

さて、「書肆綿屋喜兵衛引札」で注目すべきは、左側の取り扱い本の説明書きである。

一 諸本類 一 萬画艸紙類 一 浄るり本〔正本七行／五行四行〕

右之通諸書物ヲ始當用物往来物之類不殘／其外面草紙画本類江戸錦繪合卷之新板月々ニ賣出し／申候其れ江戸歌大番附小番附流行歌一文はんこニ至迄直段／相働候間出店方へ不相變御用被仰付候様偏奉希上候

堀江出店大坂心齋橋通り塩町角

卸處

綿屋喜兵衛

まず書肆綿屋喜兵衛については、井上隆明氏の『改訂増補』近世書林板元総覧』（平成一〇年刊）に依れば、

◎綿（和多）屋喜兵衛 金隨堂 前田氏 和多屋

大坂北堀、心齋橋筋塩町角、同橋平野町西入、北堀江市之側（神靈矢口渡・上方板。寛政九年本）、御池

通二丁目

傾城竈照君 享保3（寛政後印）

諺へその宿替 18合

* 版画の綿喜、ハタキ。貞信らの作。『上方絵一覽』に、雲隨堂とある。一枚摺も多し。

* 家伝葉「太声円」を販売。明治十三年三月に、「浪花土産」を創刊。

何故に上方で合巻が作製されなかったのか

とあり、この綿屋喜兵衛に間違いない。引札の「其外面草紙画本類江戸錦繪合巻之新板月々二賣出し申候」という箇所が注目される。つまり、江戸の錦絵や合巻の新板を毎月売り出すというのである。江戸から錦絵や合巻を運んで来ているわけである。要するに、こうしたものを上方で作るよりも、江戸で出来た物を直接持って来て売った方が安直に儲かったであろうと思われる。これが、上方で合巻が作製されなかった理由であったのである。

なお、馬琴作の『月水奇縁』（文化元年四月）が、上方浮世絵師流光斎如圭画、大坂河内屋太助刊であったことは、『月水奇縁』という本の作製が大坂で行われたことを意味している。これのみならず、『俳諧歳時記』（享和三年三月、大坂柏原清右衛門・河内屋仁助・河内屋太助刊）、『蓑笠雨談』（享和四年正月、名古屋永楽屋東四郎・大坂河内屋太助・江戸葛屋重三郎刊）の執筆の約束を、馬琴は享和二年五月九日から八月二十四日にかけての京坂旅行の際に、河内屋太助から取り付けてきていたものと思われる（拙稿『俳諧歳時記』の出版）『東海近世』第十三号、平成十四年十月」と、同じく『蓑笠雨談』諸板出版の顛末とその周辺」『讀本研究』第十輯下套、平成八年十一月』を参看していただければ幸いである。

一方、岳亭定岡が、『俊傑神稲水滸伝』初編（文政十二年正月、大野木市五郎・塩屋卯兵衛刊）の画作をしたのは大坂においてのことであった。栗杖亭鬼卯の場合もこれに近いものがある。

このように、上方には、原稿を江戸から持って来る、あるいは作者を江戸から大坂へ呼んできて原稿を書かせる、といった伝統があったことを思い合わせれば、これとは対照的な考え方、すなわち合巻の場合には、上方で作るよ

りも江戸で出来た物を直接持って来て売った方が安直に儲かる、という大坂的な発想には頷けるものがある。
これが、上方において合巻が作製されなかった現象面での原因であったのである。

何故に上方で合巻が作製されなかったのか

